

国際文化学部 海外フィールドスクール 2018年度「開発と文化」コース



2018年3月28日(水) 外濠校舎S307

「開発と文化」コースの到達目標

1. SAで培った外国語運用能力を異文化環境でのコミュニケーションに応用する際に何が重要かを理解し、実践することができる
2. 問いを立て、確立した調査方法を用いながら論理的で説得力のある調査報告を執筆することができる
3. タイにおける「難民支援」「移民教育」「少数民族と観光」の実情と課題を理解し、学部学生が内容を理解できるように発表できる

概要

- ・ 研修地：タイ西部ターク県メーソット市周辺（ミャンマー側のミャワディを含む）
- ・ メーソット：人口約12万人。ビルマ族、カレン族が多い。仏教、キリスト教、イスラム教など。
- ・ 期間：2018年8月5日～13日
- ・ テーマ：①難民支援、②移民教育、③少数民族と観光（生態博物館）
- ・ 研究方法：文献（日本語、英語）、インタビュー、参与観察

3つのテーマ①難民支援

- ・ 隣国ミャンマー（旧国名ビルマ）の内戦（民族紛争）や民主化運動の弾圧などによって1960年代以来多くの住民がタイ側に避難
- ・ タイは難民条約に締結していないが、独自の基準で「避難民収容所」として難民キャンプを設置
- ・ 2018年2月現在で9のキャンプに10万人収容
- ・ ミャンマーの民主化・内戦終結で「帰国可能」になったが
 - － 本国帰還を積極的に推進（政府、国連難民高等弁務官事務所）
 - － 自発的な帰還を支援
 - － タイに残る人たちへの支援も検討
- ・ 民主化後の難民帰還の現状と課題を調査・研究



3つのテーマ②移民教育

- ・ 1980年代のタイの経済成長＋ビルマ経済の停滞→ビルマからタイへの移民増大(現在200万人程度)
- ・ 不安定な労働の問題(スマトラ大地震、強制帰国)
- ・ 家族で移民労働者となっているケースが多い
- ・ メーソットの人口の75%はミャンマー人と言われている
- ・ 移民子弟の教育をめぐる問題
 - 何語で学ぶか?(タイ語、ミャンマー語、英語?)
 - 公立学校と移民学習センター(MLC)
 - ミャンマーの民主化後、「帰国可能」な状態になったこと
- ・ タイのミャンマー移民の子弟たちへの教育の現状と課題を調査



3つのテーマ③少数民族と観光

- ・ タイ西部に多く住むカレン族(詳細は事前学習)
- ・ 生態博物館(エコミュージアム): 地域全体を「博物館」にする。自然環境と人々の生活の総体を保存し、地域の活性化に活かすアイディア(1970年代、フランス発祥)
- ・ シーナカリンウィロート大学ボディヴィジャラヤ校のチー先生が「持続可能な開発のための教育」として、タイ初の生態博物館を開始
- ・ ヨーロッパや中国の生態博物館の先行研究を読んで、生態博物館の意義と課題を理解した上で、現地のコミュニティに2泊3日し体験型の調査を行なう。



事前学習

- ・ 5/7(月)18時半～20時:講義、グループ分け、課題文献の提示、今後の進め方の指示をするので必ず出席すること!
- ・ その後は授業支援システムを通じて指導。
- ・ 参加者の都合を聞きながら7月上旬に第2回事前学習を実施。質問項目等を確定する。
- ・ なお、担当教員の松本は2018年度は在外研究でタイにいる予定(smatsumoto@hosei.ac.jp)。

事後学習

- ・ 法政大学懸賞論文or/and国際文化情報学会での発表を行なう。
- ・ 指導は授業支援システムとメールを通じて行なう